



埼玉県農協農政対策委員会委員長賞

二段目に詰まっているもの

さいたま市立与野西中学校 三年

小山 和子
こやま わこ

私のお弁当の二段目は、やっぱり今日もごはん。小さい頃の私は、友達が持ってくるサンドイッチやパスタのお弁当をとてもうらやましく思っていた。「なぜ私のお弁当は、いつもごはんなのだろう。」と。

我が家の夕食の食卓には、必ずごはんが並ぶ。そして毎日お米を研ぎ、炊飯器のスイッチを入れるのが私の役割である。だが最近、ごはんをよそうのも私の担当になりつつある。私は調理にはあまり参加できないので、お手伝いといえば、よそう、食卓にはこぼ、という単純作業を繰り返していた。その結果、全体量における家族個々のニーズに合わせた分量配分が得意になった。そしていつの間にか毎晩、私はしゃもじを握っているのであった。

ごはんを毎日よそり始めて、気づかせてもらったことがたくさんある。炊きたてのごはんが入ったお釜をパツと開ける、この瞬間がとても好きだ。ふわりとしたあたたかな空気。柔らかく鼻孔をくすぐるごはんのにおい。満たされた幸せな気分がひたりながら私は今日も、相手が食べるところを想像してごはんをよそう。はこぼ。そしていただくのだ。

「あれ？お米の種類、変わった？」

「えーすごい。よくわかったね。」

「今日、早炊き？固めもおいしいよね。」

「うん、ちょっと時間が間に合わなくて。」

「ねえ、今日のごはん、つやもあるし特においしい！」

「本当？よかった。確かに。よく噛むと甘みが際立つね！」

たわいもない会話が続き、このあたたかい食卓が、大好きだ。

そんな日常がこの夏休み、残念なことに殆ど変わってしまった。私は中三、受験生。机に向かい続ける本気の夏が始まったのである。毎日塾に通いつめるため、朝ごはんしか家で食べることができなくなってしまった。昼も夜も塾で黙々とお弁当を食べている。家族全員が唯一集まれる夕食の時間がなくなってしまったため、会話も以前に比べ減ってしまった。なにせ私は帰宅時間遅く、風呂に入り就寝し、朝は起きて身支度を整えたら出かけているのだから無理もない。父は仕事、妹は部活、母はそれぞれの予定に合わせて家事をこなしてくれている。それぞれが自分のやるべきことに向き合っているのは良いことなのだが、少しさみしいような気がした。

なんとなくやりきれない思いを抱えたまま、塾でお弁当のナプキンを開いたある日のことである。その日のお弁当には蓋に母からのメッセージが付いていた。『おつかれさま。お米の種類が変わったけれど、気づいたかな？冷めてもおいしいんだって。味わって食べてみてね。まだまだ長いけど、無理せず適度に休憩をとってね。』とある。その日のお弁当はなんだか殊更においしかった。嬉しかったのだ。些細な言葉だけれど、心遣いとおいしいごはんが何よりも、嬉しかった。ごはんについて話をしたり、たくさん面白い会話をしていたあの食卓に、いつでも戻れるような気がしたのだ。ごはんを食べる度に思い出す、あの我が家の食卓の風景。ごはんが私の幸せな記憶を私の中につなぎとめてくれていたのだ。ただの白いごはん、なのかもしれない。当事者の私も最初は気づくことが出来ていなかった。だが今の私にとってごはんは、家族と私をつなぐ架け橋であり、背中を押してくれる応援団でもある。栄養素としての働きだけではない。生産・流通・調理などに関わる人々の込められた想いは強く、あたたかく、なにより心と体の揺るぎない原動力になる。私をいつでもあの幸せな時間へと連れていってくれるのだ、このごはんは。

私の母がお弁当の二段目をごはんにし続ける理由が、少しわかった。そして、私のお弁当の二段目は、やっぱり今日もごはん。

「私は、ごはんが大好きだ。」